

Title	個人的空間(パーソナル・スペース)の研究(1)
Sub Title	A study of personal space (1)
Author	岡田, 守弘(Okada, Morihiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1974
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.14 (1974.), p.51- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000014-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

個人的空間 (パーソナル・スペース) の研究 (1)

A Study of Personal Space. (1)

岡 田 守 弘

序

対面する対人関係での communication は単に言語だけに依存するのではなく、表情・身振り等の非言語的行動をも媒介として初めて前者の意味が完成されるのである。言語面への過度の依存は時として重大な過ちを犯す。というのは、言葉は表現機能を有すると同時に隠蔽機能をも有するからである。ところが、非言語的行動は即物的で非論理的であるために言語よりも容易に外部に露呈されやすい (井村と木戸, 1973)。それ故に非言語的側面の研究が人間行動の理解に一機能を果たすわけであるが、本論文では取り掛かりの一端として、動物習性学で論議されている territory のような目に見えることができる固定的地理的空間ではなく、「個体間で維持されていて目に見えず、かつ個体と共に移動する個人的空間 (personal space)」(Sommer, 1959) の対人的使用を中心に概観し若干の問題を文献的に検討することにする。

1. 個人的空間の規定

個人的空間の概念は未だ確立したものではないようで、territory の概念との重複・混同も見られるが、Sommer (1959, 1967) は両者を次のように区別している。

表 Personal Space と Territory との相異

Personal Space	Territory
(1) 携帯可能である。	(1) 比較的固定している。
(2) 境界は invisible である。	(2) 境界には印が付けられていて visible である。
(3) 中心は身体である。	(3) 中心は home である事が多い。
(4) 侵入に対して身を引く。	(4) 支配の維持のために侵入とは戦う。

Hall (1959, 1966) は communication における時間と空間の使用を個体の生物学的・文化的側面から考察したところ、他者との出会いで保たれる距離のとり方に生物学的規定因だけでなく、文化的規定因がある事を見出した。話をしている相手が余りにも接近しすぎたり離れすぎたりしていると不快を感じ、言葉上は何ら論理的矛盾も行き違いもないのに個人間の相互作用に違和感や誤解が生じてくるので、相手との距離は相互の期待と一致したものである必要があるとの見解から、Hall は次の4距離帯を規定した。即ち、他者の身体と密接に関係している事がはっきりと捕えられる「密接距離」、自分と他者との間に保つあわ (bubble) で個人的関心や関係が論議される「個体距離」、身体的支配の限界を越え必ずしも個人的でない要因が介在する「社会距離」、involvement の範囲の十分外側で公的機会に利用される「公衆距離」の4距離帯である。これらの距離帯は「非公式空間」で、多くの場合意識されず文化に規定された習慣的行動様式である故に、個人間の相互作用に深い意義をもたらすのであると Hall は述べている。(Hall 1966)。

これらの距離帯は一つの目安であり、物理的距離そのものに普遍性はないが、Hall が4カテゴリーに区分し定義した点に意義がある。距離帯の概念は単に物理的間隔を表わしているのではなく、領域・空間が当然含まれていて対人間の問題であり、Sommer の個人的空間と同義又は大変類似したものであると考えられる。

さらに、「個人的空間とは、個人が他者との気楽な会話で好んでとる距離の総計である (Rodgers, 1972)」として intimacy の獲得・維持の機能を基準とする者、他者の侵入を許さない防壁又は境界で defence 機能を基準とする者等々の立場があるが、ここでは何らかの対人的相互作用のある場合の個人の空間的行動 (距離のとり

方も含めて)の全てを扱うのが個人的空間の研究領域であると規定する。

II. 個人的空間の存在

個人的空間の存在を探る最も可能な方法の一つは、ある個人に別の個人が接近して彼の反応を見る実験であるが、この方法を中心に個人的空間の存在とその特徴とを概観する。

Horowitz, *et. al.* (1964, 1965) は、男性・女性・物体の 3 目標に正面・側面等の 8 方向から被験者を接近させる実験(接近実験と仮称する)を行った。被験者は目標に接近すると適当な距離をとって停止する(不快と感じるまで接近させる場合や、基準を指定しない場合等がある)が、その位置と目標との距離が測定され、被験者を中心とした図に各方向での距離がプロットされてきた領域を個人が保持しようとしている距離帯、即ち、「身体緩衝帯 (body-buffer-zone)」であると彼等は規定した。分裂症者、非分裂症患者、正常者を被験者に種々の実験が行なわれ、(1)比較的一定の再現可能な距離帯が得られ、対人よりも対物体での距離は小さく、(2)分裂症者は対人でより広い身体緩衝帯を有している(換言すると、分裂症者は他者に近づかない)、(3)身体緩衝帯は前面で広く側面・後面の順に狭くなる、(4)男性は女性に接近する、という結果が得られた。又、症状の推移との関係では、分裂症者は入院直後に身体緩衝帯が最大で、症状が軽快し社会化されるにつれて縮小の傾向があり、神経症者は逆に拡大の傾向を示した (Horowitz, 1968)。個人の心理的要因だけでなく、治療スタッフとの対人関係に心的距離が反映されてくる結果であると考察されている。Newman & Pollack (1973) は、9 年生の知能正常な学業不振児と行動問題児を被験者とし、不快と感じられるまで実験者が接近していく接近実験を行った。個人的空間の前面から後面へと拡大する傾向と、個人による左右差と、不安・緊張の強い問題児の領域が広い事が見い出された。彼等は、被験者が後方を見ることができず実験者との視的接触 (eye-contact) が不可能であるために後面領域が拡大したのでであると考察しているが、Horowitz 等は後面の空間は相手の性別に関らず狭いとの結果を得ている。この事は単に手続上の相異であり、被験者が目標に接近する接近実験法であったためにむしろ後面領域が狭いとする Horowitz の見解が妥当と思われる。又、個人的空間には defence 機能と intimacy 機能との両面機能があり、その時々心理状態、周囲の状況により機能が異なると考えるべきであろう。栗田

(1972) は、空間にはヤムスの性質があると述べている。

McBride, *et. al.* (1965) は、男女大学生に男性・女性・物体・絵画を前後左右から接近させて G. S. R. を測定した。G. S. R. は前方からの接近で最大で、側方・後方の順に小さくなった。同性より異性の接近に対する反応が大きいが、被験者の性差は有意でなく、1 ft. の距離で互に凝視していると男女とも男性に対する時の方が反応が大きいが事が見い出されている。後藤ら (1969) は、正常者 (19~21 才) に実験者が予告なしに接近した時の精神生理的反応を測定したところ、距離が短縮されると呼吸・脈搏数の変化が認められ、実験者との面識の有無・性別によってその変化に相異がある事を見出した。Rodgers (1972) は、男女大学生に女性が接近する場合に快適さを基準とする接近実験を午前 (8:30~9:30) と午後 (14:30~15:30) の 2 回に分けて同一被験者に実施した。個人的空間は午前で大きく、内向的な者は午前で個人差が大である事が見い出され、個人的空間の大きさは arousal level と関連していると考察されている。Dosey & Meisels (1969) は、男女大学生に stress 操作を行い、被験者同志が接近する接近実験で、stress が強く働いていると個人的空間が拡大する事を見い出している。

個人的空間と人格とについて、Williams (1962) と Leipold (1963) は内向的な者は外向的な者より距離を大きくとると報告しているが、Dosey & Meisels (1979) は body-image の弱い高不安との間で、Rodgers (1972) は内向-外向性尺度としての sociability との間で積極的な関連を見い出していない。

Mehrabian (1968) は、面接者間の性別・好意度を独立変数とし、距離・視的接触等の 12 の測度を従属変数として男女大学生に面接者の役割演技をさせたところ、距離・視的接触・体軀の定位 (orientation of body)・relaxation は被面接者への好意を示す有意な指標である事を見い出している。Rosenfeld (1965) は、social approval との関連を見るために女子大学生に approval の “seeking” 又は “avoiding” の役割をとらせて女性に面接させた。seeking 群が接近した位置を占め、対人的近接性 (interpersonal proximity) は親和性行為であると解釈されている。

Argyle & Dean (1965) は、安定した intimacy には最適均衡状態があり、視的接触・physical proximity (物理的近接性) 等と関数関係にあって、いずれかの要素の増減は他の要素の減増となるとの予測から、(1)二者間の距離が短縮されて physical proximity が増すと視

的接触が減少し、2 ft. と 6 ft. との間に最適均衡状態があり、(2) intimacy が予め確立している面識のある面接者が閉眼して視的接触をなくしてしまうと、被面接者は一層接近するという事を実験的に確認している。physical proximity はある意味では個人的空間への侵入であり、面接の始め（いわゆる出会い）又は終りでは何らかのサインを表わしているものと考えられる。ところで、二者間に相互作用があり安定した intimacy が確立されてしまえば、physical proximity はもはや何らの機能を果たさないものであるか (Argyle, 1972) 否かについて検討した Lassen (1973) は、physical proximity と intimacy との間に一次的関係を明確に得ず、Porter, *et. al.* (1973) は対人知覚との間に有意な関連を見い出していない。Porter, *et. al.* の実験では、出会いの操作の有効性に疑問があり、又、対人知覚の信頼性の検討も不十分であるので問題を残している。

対人的距離のとり方の性差についての接近実験では、男性は相手の性別に関らず距離が一定である (Dosey & Meisels, 1969)、逆に女性は相手の性別によって有意差がない (Horowitz, *et. al.*, 1964)、女性同志は接近する (Dosey & Meisels, 1969)、男性は女性に接近する (Horowitz, *et. al.*, 1964)、女性は男性との間に距離をおく (Dosey & Meisels, 1969; Rodgers, 1972) 等の実験結果があり、又、G. S. R. を測定した McBride, *et. al.* (1965) は性差を見い出していないが、精神生理的反応を測定した後藤ら (1969) は相手の性別による変化を指摘している、等々の報告があり一定の結果を得ていない。夫々の観察状況には種々の要因が働いていて複雑で一義的に性差の比較はできない。

Horowitz (1966) は、身体緩衝帯には本能的又は imprint された構造がなく、獲得された body image の一部であり、世界の空間的体制を内部に involve した内的概念であり自我境界であるとの見解である。又 Sommer (1969) も個人の自我領域が個人的空間であると述べている。しかし、Hall (1966) は、個人を取り巻く空間について「不規則な風船」の様なものであると言っているのみで特定名を与えていない。いずれにしても、個人的空間は個人を取り巻くあわのような自我境界と見なせば、個人的空間は力動的で心理的要因によって、その時々他者との関係で変化し姿を変え機能も異なるものであろうが、これまでの概観もその事を示唆している。なお、投影的方法で測定された個人的空間と接近実験による測定結果との間で、Haase & Markey (1973) は一部有意な相関を見い出しているが、Dosey &

Meisels (1969) は有意な相関を見い出していない。このことは、方法・手続に関する問題であって、これまでに述べられた諸事実により個人的空間の存在は認められる。

III. 空間配置の問題

個人的空間には、ある物理的環境の空間配置内で個人がとる空間的行動の諸特性と、その空間配置から個人が受ける影響という2側面がある。

個人がいかなる空間的行動をとるかに関して、Sommer (1959) は自然な条件で観察できるように病院の軽食堂で個人がいかなる席を占めるかを長期間観察した。(1)二者間に相互作用が認められる場合には、隣り同志の位置が占められるのが大部分で、しかも食卓の角をはさんで坐る—corner-to-corner—ことが多く、向かい合う—face-to-face—ことは少なかった。(2) 2人・3人集団に、ある事柄について討論する課題を与えたところ、机の大きさに関らず corner-to-corner が多かった。(3)同じ条件で、分裂症者は全く別のかけ離れた席に坐る者が多く話し合いも行なわれなかったが、非分裂症の患者（うつ病、酒精中毒等）は正常者と全く類似の行動であった。(4)討論課題状況で男女のサクラを用いて、机・椅子の配置を変化させたところ、男性は相手の性に関らず等しく接近した位置を占めた。女性同志は男性同志よりも接近した位置を占め、男性に対しても女性はより近い位置を占めた。一方、分裂症者は正常者で決して見られない特異な位置の占め方を示した。

以上の観察から、小集団では個人間の距離と communication との間に単純な関係はなく、face-to-face が好まれるのは少く、そして、隣り合う位置を占めると対人的相互作用が多くなるが corner-to-corner よりは少くなると考察されている。即ち、相手といかなる距離で、そして、いかなる角度で対するかが空間配置の原理を説明しているのである。又、彼の研究での分裂症者は個人間の距離の概念が障害されていて、例えば、女性のサクラと密接して並行した位置を占め、相手の個人的空間に侵入してしまう。このために看護者等是不快になり、距離を保つために引き下がり、ますます患者との相互作用の機会が減少するという事が観察された。仲宗根 (1972) は、分裂症者、非分裂症患者、正常者との面接において面接者の視線・体の向きを一定にしておいて被面接者の選択する位置を調べた。正常者は 60~100 cm の距離内で面接者から 35°~65° の視野内に位置するが、分裂症者は、(1)正常者・非分裂症患者と何ら変らない者、(2)面接者に接近しているが面接者の視野の周辺部に

位置する者、(3)面接者の視野の周辺部ではないが遠い距離に位置する者という3つの行動様式が見い出された。彼は、個人間の距離だけでなく視角・視的接触と心理状態・症状との関係があると指摘している。

一方、物理的環境の空間配置が個人の行動に効果をもたらす事を調べた研究がある。Lassen (1973) は、2～9 ft. の種々の距離で医師と患者の椅子を設置して、初診時面接での physical proximity の効果を調べた。会話の内容や流暢さの分析から得た不安度と面接直後の自己評定とから、距離が増すと不安は増大し訴えの論旨を明確にし得なくなっていくが、6 ft. の間隔では不安や恐れに卒直であったとの結果が得られている。二者間に障害物のない直線的面接場面では 9 ft. も距離があると全身が観察されてしまい不安が生起すると考察されている。又、実際の診察場面では、医師と患者との相互作用は本来評価的であり、6 ft. の「社会距離」で行なわれるのが良いわけで、Hall の距離帯が有効な独立変数である、と Lassen は示唆している。Holahan (1972) は、精神病院内のディ・ルームで空間的距離が密接になるように椅子を机の周囲に配置した場合—socio-petal 型配置—と、机と遠い距離に椅子を離散的に配置した場合—socio-fugal 型配置—とを比較したところ、患者は socio-petal 型配置を好んでいる事、socio-petal 型配置が患者の社会的・個人的相互作用を増大させたという結果を得た。この事から物理的空間配置は精神病者の行動に効果を与えるものと考察されている。

ある物理的空間配置内での空間的行動の性差について種々の観察がある。Baxter (1970) は、動物園で2人集団の二者間の距離を測定したところ、男女間は最も接近し、次が女性同志であり男性同志が最も離れている事を観察した。年齢と人種により交互作用があるが、女性は他者に対して多くの好意を伝達するものと示唆されている。Mehrabian (1972) は、Baxter のこの結果から女性はある状況では余り relax していないと思われる姿勢によってさへ従順さを伝えるのであると解釈している。Hashka & Nelson (1972) は、街頭での観察から、女性は二者間の関係により異なる距離をとるが、男性は一定している事を見出した。人間関係によって距離のとり方に性差があるのは socialization の違いが反映されているのであって、女性は見知らぬ他人に defensiveness を発揮して距離を大きくとるのであろうと考察されている。Willis (1966) は、1人以上の女性が混っていると距離は接近する事と、女性では距離が短縮されるまで挨拶する timing が遅れる事を観察している。

Hashka & Nelson は Willis の結果に対しても、女性の defensiveness の違いによるものと解釈している。Sommer (1959) と仲宗根 (1972) とは、二者間の性別による空間的行動の性差、女性の分裂症者の行動の特異性を指摘しているが、Baxter 等の観察からもわかるように、空間的行動には socialization や defensiveness の性差が反映されていて文化的要因との連関があり本質的性差の存在について不明である。

個人的空間を直接取り扱っていないが、比較的広い物理的空間内で個人の行動特性を調べている研究がある。平尾と台 (1964) は、大学生を対象に講堂(受講者数の約4～5倍の収容能力がある)での講義で占められる位置を連続観察し、座席の成立過程を調査した。講師・講義内容等により多少の変動が認められるが、長期的には集団としての座席密集分布には不均一なパターンがあり、高度の座席密度は演壇より見て、左右前方の席をピークとして前後左右に広がっていた。この場合、講師との視的接触が良い場所は前方と前方側面である事が多く、高度の座席密度と対応している事が見い出された。Batchelor & Goethals (1972) は、高校生を対象として、集団活動が成員の空間配置に与える効果を調べた。課題について集団決定する群と個人決定する群とに2分し、大部屋内で自由に各自の位置を選択させたところ、集団決定群では対人距離が短かく、Hall の「個体距離」内であって相互の視的接触が多い円陣様の空間配置が典型的であった事が見い出された。一方、個人決定群では対人距離の分散が大であるが、快適な会話のための距離内で隣り同志が位置を占めるというある種の norm の存在が認められた。

平尾らの観察結果は、多数の人間の集まりの中から得られた空間配置であるが、座席の集中定着性と移動様式の組み合わせから個人の行動は類型化され得るので、集団の座席パターンは個人の行動特性の集合と見なされている。深沢ら (1965) は、女子慢性分裂症者の講堂での音楽療法場面で平尾らと同様の観察を行った。集団としての特異な座席密度分布の存在と、個人としては臨床症状の変化に伴って変位・移行する者がいる事が観察された。この点について、Horowitz や仲宗根は全く異なる方法で観察しているのであるが、臨床症状と個人的空間との関連を報告している事と併せて大変興味深い知見をもたらしている。

学校の教室環境に不合理なものが多い事を Sommer (1969) は指摘しているが、教師対生徒の関係を物理的空間配置と個人的空間との関係で考える必要があろう。座

席配置の定式的決定法がないために、複教行の直線配置しかできない長方形の教室では座席配置の問題、即ち、座席が生徒の行動・態度に与える効果の問題がある。Schwebel & Cherlin (1972) は、小学校で座席配置の効果を調べている。初めに、教師の座席配置法を調査したところ、生徒自身は半数以上も前席を好んでいるにも関わらず、教師は確固とした裏付けを持たず「直観的に」座席を割り当てる事が多いという結果が得られた。そして、彼等は幼稚園児から5学年生までを対象として、観察期間中にランダムな座席変更操作を行い、その前後で生徒の行動を観察し、さらに生徒自身と教師による態度評定を行った。前席者は注意集中が良く積極的で好ましく、又、座席変更操作によって前席に移動した者についても以前と比較して注意集中が良く好ましいとの評価が得られた。Walberg (1969) は、高校生を対象として座席の好みと人格との関係を調査したところ、座席に対する好みと人格との間に有意な相関を見出している。Levinger & Gunner (1967) は、大学生を対象として、投影的に個人的空間を探る方法（各種のシルエットを空間的に配置させるテスト）によって調査したところ、教室の後方に坐る学生が前方に坐る学生に比べて自己と教授との間に大きな距離を置く事を見出している。Schwebel & Cherlin は、座席と教師の生徒に対する評価との間には文化的・社会的規制や教師の個人的要求が介在していると考察しているが、教壇と座席との距離関係（複数行の直線配置型しかできない長方形の教室では後席と教師との間で「社会距離」又は「公衆距離」が保たれてしまう）や視的接触の効果が考慮されていない。Walberg が後方や窓側に位置したがる者に問題学生の多い事を、平尾らが問題学生の横方向移動という特異な行動様式（教師に志向しない非現実的態度）がある事を、仲宗根が分裂症者の距離と視野とに特異な行動様式がある事を見出しているのであるから、教師と生徒との相互作用には、個人的空間の問題、特に物理的空間配置の効果との関係が考慮されて当然である。

IV. 個人的空間の発達

対人的相互作用を可能ならしめる個人的空間の発達について、栗田 (1972) は出産によって生じた母子の空間共有関係にその端を発するとの見解であるが、橘と杉野 (1973) は母子間の attachment の関係から、初期の母子関係では緊張を緩衝する母親を媒介することによって他者との距離が規定されて成長とともに独立した自我領域が生じてさらに他者との距離が規定されてくるとの見

解である。ところで、橘らは対人的発達が未分化で個人的空間が形成されていない重症心身障害児を対象として接近法で 1.5 m 以内という「働きかけの最適距離」を見出している。しかし、対人関係が未発達な重症心身障害児にとってこの最適距離が妥当なものであるか否かについて、彼らの提唱する「生活保育」の実践を通じて検討される必要がある。

Casttel (1979) は、生後 15～36 ヶ月の乳幼児について母子間及び乳幼児間の距離を観察した。物理的・社会的に未知な環境では、乳幼児は母に接近し母子間の距離は短縮する事が見出された。King (1966) は、幼稚園児 (3～5才) を対象として unfriendly act と距離との関係を 3人集団の自由遊びで観察した。unfriendly act は距離に関連していて、接近していると多く、優位な者に対しては、距離を大きくとる事が見出された。Argyle & Dean (1965) は接近法で児童 (5～12才) は成人より接近する事を、Baxter (1970) は児童 (5～10才)・青少年 (10～20才)・成人 (20才以上) の順に二者間に相互作用のある者の間の距離が増す事を動物園での自然観察で見出している。Statt (1972) は、2・4・6 学年児について社会的距離を調べたら 2 学年児と 6 学年児との間で有意差を見出している。Aiello & Jones (1971) は、1・2 学年児 (6～8才) について運動場で二者間に相互作用のある者の間の距離と体の向きとを観察した。この年令ですでに距離と体の向きとに文化差があり、白人では性差が認められ、男児同志の距離が大きいう事が見出された。Jones & Aiello (1973) は、1・3・5 学年児 (各平均年令: 6才10ヶ月, 8才10ヶ月, 10才10ヶ月) を対象として、話し合い場面の二者間の関係を観察した。5 学年になるまでに性差が形成されていて、男児は互に向きあう事が少なかった。1 学年ですでに距離と体の向きとに文化差が見出されているが、5 学年になると距離の差はなくなる一方、体の向きは変わらず維持されていた。距離・体の向きのとり方は人生の初期に獲得されていて多数者文化 (優位) と少数者文化 (劣位) との間には空間の使用に基本的差異があり、すでに 1 学年で文化差が存在している。しかし、年令とともに距離が変化しても communication barrier としての体の向きは高学年になっても変わらず維持されていると説明されている。彼等の説明は、文化が involve されてくる社会化過程と対応して個人的空間が規定されてくるという Hall の説に沿ったものであるが、文化と社会的・経済的階層との混同があり、さらに異文化との組み合わせが調べられていないので不明確である。Heshka & Nelson

(1972) は、19才から76才の互に相互作用のある2人集団を街頭で観察した。年台とともに個人間の距離が増大するが、40才がピークである事が見いだされた。成長とともに依存性が規制されて依存的行動が変化するが、個人間の距離のとり方はその変化と対応している事、老人では身体的制約から逆に依存的行動が増すためであると考察されている。

個人的空間の決定因の問題と同時に、獲得的なものであり、そしてそれは文化によって規定されるものであるのか、それとも人間に固有でいくらかなりとも普遍的なものであるのかという問題の解決の糸口は発達的研究にあると思われるが、その意味でも個人的空間の発達に焦点を合わせた研究が今後とも必要であろう。

V. 結 語

以上の叙述から、個人的空間の存在とその特徴及び心理的・精神生理的要因との関係、物理的環境の空間配置と個人の空間的行動との関係等が概観された。

対人間の相互作用にとって個人的空間が意味のある変数であるのかの問題、即ち、それがどれほどの communication 機能を有しているものであるのかの問題及びそれが文化を越えて普遍性を有しているものであるのかの問題については、未だ十分に確認されているとは言えないようである。個人的空間の対人的使用は非論理的であるために、当面は個別的に記述的に資料を収集していかざるを得ない。観察や実験の手法が多様であることは、個人的空間の理解のために豊かな知見を提供してくれることになるのであるが、その際に、条件設定の厳密さと状況及び手続の詳細な記述が必要である。

引 用 文 献

- Aiello, J. R. & Jones, S. E. (1971) Field study of the proxemic behavior of young school children in the three subcultural groups. *J. Personal & social Psychol.*, 9, 351-356.
- Argyle, M. & Dean, J. (1965) Eye-contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304.
- Argyle, M. (1972) *The psychology of interpersonal behavior*. (2nd. Ed.), Penguin Books.
- Batchelor, J. P. & Goethals, G. R. (1972) Spatial arrangements in freely formed groups. *Sociometry*, 35, 270-279.
- Baxter, J. C. (1970) Interpersonal spacing in natural setting. *Sociometry*, 33, 444-456.
- Castel, R. (1970) Effects of familiar and unfamiliar environment on proximity behavior of young children. *J. exp. child psychol.*, 9, 342-347.
- Dosey, M. & Meisels, M. (1969) Personal space and self-protection. *J. Personal. & social Psychol.*, 11, 93-97.
- 深沢文彦, 西形雄次郎, 菱山珠夫 (1965) 慢性分裂病者の行動特性—座席の生態学的研究. *精神経誌*, 67, 1197-1205.
- 後藤 昭 他 (1969) 個人空間 (individual space) に関する研究第1報 (学会報告). *精神経誌*, 71, 173.
- Hall, E. T. (1959) *The silent language*. Doubleday & Company. (国弘正雄他訳 沈黙のこぼれ. 南雲堂, 1966).
- Hall, E. T. (1966) *The hidden dimension*. Doubleday & Company. (日高敏隆他訳 かくれた次元. みすず書房, 1970).
- Haase, R. F. & Markey, M. J. (1973) A methodological note on the study of personal space. *J. Consult. & clinical Psychol.*, 40, 122-125.
- Ileshka, S. & Nelson, Y. (1972) Interpersonal speaking distance as a function of age, sex, and relationship. *Sociometry*, 35, 491-498.
- 平尾武久, 台 弘 (1964) 講堂における座席の成立—個体行動の類型化とその Dynamics—. *精神経誌*, 66, 987-1003.
- Holahan, C. (1972) Seating patterns and patient behavior in an experimental dayroom. *J. abnor. Psychol.*, 80, 115-124.
- Horowitz, M. J., Duff, D. F., & Stratton, L. O. (1964) Body buffer-zone: Exploration of personal space. *Arch. Gen. Psychiat.*, 11, 651-656.
- Horowitz, M. J. (1965) Human spatial behavior. *Amer. J. Psychother.*, 19, 20-28.
- Horowitz, M. J. (1966) Body image. *Arch. Gen. Psychiat.*, 14, 456-460.
- Horowitz, M. J. (1968) Spatial behavior and psychopathology. *J. Nerv. Ment. Dis.*, 14, 24-35.
- 井村恒郎, 木戸幸型 (1973) コミュニケーションの病理. 異常心理学講座, 第9巻, 245-318, みすず書房
- Jones, S. E. & Aiello, J. R. (1973) Proxemic behavior of black and white first-, third-, and fifth-grade children. *J. Personal. & social Psychol.*, 25, 21-27.
- King, M. G. (1966) Interpersonal relations in pre-school children and average approach distance. *J. genetic Psychol.*, 109, 109-116.
- 栗田靖之 (1972) 生態心理学としての空間論. 季刊人類学, Ⅲ (4), 193-216.
- Lassen, C. L. (1973) Effect of proximity on anxiety and communication in the initial psychiatric interview. *J. abnor. Psychol.*, 81, 226-232.
- Leipold, W. D. (1963) Psychological distance in a dyadic interview. (Unpublished) In R. Sommer (1969) *Personal space: The behavioral basis of design*. Prentice-Hall.
- Levinger, G. & Gunner, J. (1967) The interpersonal

- grid: 1. Felt and tape techniques for the measurement of social relationships. *Psychon. Sci.*, 8, 173-174.
- McBride, G., King, M. G., & James, J. W. (1965) Social proximity effects on GSR in adult humans. *J. Psychol.*, 61, 153-157.
- Mehrabian, A. (1968) Relationship of attitude to seated posture, orientation, and distance. *J. Personal. & social Psychol.*, 10, 26-30.
- Mehrabian, A. (1972) *Nonverbal communication*. Aldine.
- 仲宗根泰昭 (1972) 分裂症者のコミュニケーション行動: 面接時の Personal Space を中心として. 精神医学, 14, 63-72.
- Newman, R. C. & Pollack, D. (1973) Proxemics in deviant adolescents. *J. Consult. & clinical Psychol.* 40, 6-8.
- Porter, E., Argyle, M., & Salter, V. (1970) What is signalled by proximity. *Percept. mot. Skills*, 30, 39-42.
- Rodgers, J. A. (1972) Relationships between sociability and personal space preference at two different times of day. *Percept. mot. Skills*, 35, 519-526.
- Rosenfeld, H. M. (1965) Effect of approval-seeking induction on interpersonal proximity. *Psychological Reports*, 17, 120-122.
- Schwebel, A. I. & Cherlin, D. L. (1972) Physical and social distancing in teacher-pupil relationships. *J. educa. Psychol.*, 63, 543-550.
- Sommer, R. (1959) Studies in personal space. *Sociometry*, 22, 247-260.
- Sommer, R. (1967) Small group ecology. *Psychol. Bul.*, 67, 145-152.
- Sommer, R. (1969) *Personal Space: The behavioral basis of design*. Prentice-Hall. (鶴山貞登訳 人間の空間. 鹿島出版会, 1972).
- Statt, D. (1972) Behavioral measure of social distance in young children. *Percept. mot. Skills*, 35, 846.
- 橘英弥, 杉野欽吾 (1973) 重症心身障害児療育における空間の問題—療育における最適距離を中心に.— 児童精神医学とその近接領域, 14, 84-95.
- Walberg, H. J. (1969) Physical and psychological distance in the classroom. *The School Review*, 77, 64-70.
- Williams, J. L. (1963) Personal space and its relation to extroversion-introversion. (Unpublished) In R. Sommer (1969) *Personal space: The behavioral basis of design*. Prentice-Hall.
- Willis, F. (1966) Initial speaking distance as a function of the speakers' relationship. *Psychonomic Science*, 5, 221-222.